

引き抜き屋の帰還

雫井脩介

最終回

引き抜き屋の帰還 (三)

7

〈社長、大変だよ〉

九月に入ったその週の半ば、坂下さかしたから小穂さほの携帯に、父を心配するような電話があった。顧問の田中から、いろいろ厳しい現状を聞いたのだという。

オートキャンプ場の事故から、ビリー・リーが「フオーン」の姿勢を批判する流れがあり、世間からも厳しい声が飛んでいるということは何となく感じていた。並木なみきや花緒里かおりからも、「お父さん、大丈夫か?」「大変ね」という声をかけられていた。

事故そのものは痛ましい出来事には違いないが、客観的に見て運営側に過失があるものではないので、時間が経てば世間の声も落ち着くだろうと思っていた。どうやら、日を置いて記者会見に臨んだのぞ

父の姿勢が、あまり好意的に取られなかったようだ。実の親が頭を下げる光景など進んで見たいわけもなく、小穂は世の中の反応からだいたいのことを想像するしかなかった。

詳しい話を聞かせたいという坂下の言葉にはかなりの危機感がにじんでいて、小穂は夕方以降にあったアポイントを調整して、立川たちかわの彼の家おむに赴おもむいた。

訪ねてみると、深谷ふかやや田中も来ていて驚いた。長年、父を支えてきた三羽鳥さんばがらすがこの一大事に集結した形だ。

「社長から、身を引こうと思ってるって言われて、参ったよ」

深谷がそう打ち明けてきたので、さらに驚いた。まさに今日の出来事で、それがあって深谷はこの集まりに顔を出す気になっただらしい。

「大槻おおつきに明け渡すのもしゃくだから、次はお前がやれなんて言われたけど、俺が何の後ろ盾だてもなく今の「フオーン」を立て直せるわけなんてないのは、社長だつて分かるだろうに……」

最初は彼らと一緒に戸惑っていた小穂だったが、いろいろ話を聞いていくうちに、だんだん腹が立ってきた。

「でも、そんなの結局は、ビリー・リーと大槻さんが裏で手を組んでやってる話じゃないですか」

騒動のからくりは、そうとしか見えない。

「そこはもう、社長も気づいてると思うんだよ」深谷は言う。「ただ、社長自身、キャンプ場の事故が相当こた応えてるみたいだね。健太郎くんも事故で亡くしてるし、若者が命を落とすっていうのは、自己責任だ何だって話だけで割り切れるもんでもない。ましてや、自分が作つた場所でのことだからね。その気持ちさかを逆手に取つて、何にも関係ないで済まされるのかなんて容赦ようしやなく突き上げられりや、たまつたもんじゃないよ」

「思い詰めてるのは分かつてたんだがなあ」田中はもどかしげにそう言った。

「かといつて、どうしたらいいかといふとなあ」深谷が眉間みけんに皺しわを作つて言った。

「社長自身も、ほかに打つ手はないということだろう」坂下がため息とともに言う。「しかし、どうにかして思いとどまってもらわないと」

「私、父と話をしてみます」

小穂はバッグを手繰り寄せて立ち上がりながら、そう言った。

「うん……そうしてくれるとありがたい」

彼らもはや、小穂に期待するしかないようだった。そのこと自体、危機の大きさを表しているとも言えたが、小穂も小穂で、じつとしてはいらなかった。

実家に帰って、父を待った。

父が帰宅したのは、八時をすぎた頃だった。

「帰ってたのか」

父は小穂を見ると、さらりとした口調で言った。しかし無理もないが、その顔は半月前に会ったときより、ひどくやつれているように見えた。

「そうだ、ちょうどいい。あとで話がある」

まずは飯だということで、小穂も父と一緒に食卓を囲んだ。食事中はほとんど会話がなかった。「並木さんは元気か？」というようなどうでもいい問いかけに、小穂が適当に答えるだけのやり取りだった。

食事が終わり、父は、「お前も聞いてくれ」と、後片づけに立っていた母をテーブルの席に戻した。

「いろいろ考えて、社長を降りることにした」

父はためらうことなく、小穂たちにそう打ち明けた。

「長い間、お疲れ様でした」母は予期していたように、畏^{かしこ}まって応えた。

「待って」小穂はそれを制して言う。「私は反対です」

父の口もとが、相変^{ゆる}わらずだなどというように小さく緩んだ。

「悪いが、もう決めた」

「その決断は、ビリー・リーと大槻さんの思う壺つぼです。彼らはそういう青写真を描いて、お父さんを責め立ててるんです」

「社内が混乱してる。もちろん、全面的に俺を支持してくれる人間もいるだろうが、それに甘えていたら、中が割れて、じきに立ち行かなくなる。こうなったのも、俺のせいと言えば俺のせいだ。俺が責任を取って引くしかない。小穂には前に話したよな……経営の任に就く者は、いざというとき、潔く腹を切らなきゃいけない。俺にとっては、それが今だ」

父はすっかり心を固めた上で、この場にいるようだった。諦念ていねんに満ちたその顔を前にすると、何を言っても無駄むだだろうと思える。

しかしそれでも、小穂は首を振った。

「それは会社にとっても、不幸な判断だと思います。彼らに実権を渡したら、「フォーン」が「フォーン」でなくなります」

「小穂」母が口を挿はさんできた。「もういいじゃない。お父さんを苦しめるのはやめてあげて」

「でも……」

「大丈夫だ」父は言う。「後任は深谷に任せようと思ってる。簡単に大槻くんたちの好きなようにさせるつもりはない」

「その深谷さんが、自分には荷が重いつて言ってるんです」小穂は

声を強める。「そんなレールを敷いたところで、お父さんが降りちやえば後ろ盾がなくなる深谷さんが、どれだけ持つっていうんですか？ 業績が上向かなきゃ、すぐに大槻さんに突き上げられて終わりですよ。無責任です」

「小穂」母がたしなめるように口を出す。

父もその懸念けんねんは持っていたのか、かすかに苦しげな顔をした。

「そこまで小穂が心配することじゃない」父は押し通すように言った。「とにかく、俺は引くしかないんだ」

小穂を切ったときと同じだった。苦しい決断のときほど、父はそうと決めたら、もう翻意ほんいしない。

「分かりました」小穂はその気持ちを受け止めることにした。「ただ、それなら……お父さんがやらないのなら、あとは私に任せてください」

「何を言ってるんだ」父はしかりつけるように言った。「お前こそ、簡単に無責任なことを言うな」

「私がやるって言ってるんじゃないやありません」小穂は言った。「私が次の社長ふさわに相応しい人を探してきます」

「何……？？」

「私はヘッドハンターです」

ヘッドハンティングを通して、何人もの経営者と会い、その仕事

の厳しさを理解してきたつもりだ。自分に務まるなどとうぬぼれたことを言うつもりはない。

しかし、それが務まる人間を探してくることはできる。自分なら、それができる。

「どこかに、今の「フォーン」を救える、優秀な人材がいるはずです。その人を連れてきます。一カ月、時間をください」

任せたという返事はもらえなかった。

しかし、父の無言の反応は、小穂の申し出が新たな選択肢せんたくしになったことを示しているようにも思えるものだった。少なくとも、今すぐ退任の決断を行動に移すということにはならないと見てよかった。

次の日、小穂は早速、「ジェレミア・ジャパン」の社長選考で最終候補にまで残っていた高井徹たかいとほるにコンタクトを取り、会いに行った。

高井は複数の会社経営を経験しているプロ経営者の上、アウトドアの趣味も持っているアクティブな男だ。もともと畔田くろだに匹敵する優秀な人材だと思っていたから、「フォーン」の後継を探すとなれば、真っ先に声をかけるべき人物だと言えた。

小穂は高井に会うと、社名を伏せるといふようないつもの手続きは省き、「フォーン」の現状を率直に話して、この窮地きゆうちを救ってもらいたいと頼みこんだ。

しかし……。

「うーん、悪いけど、俺には難しいな」

思いのほか、高井の返事はつれないものだった。年俸ねんぼうも父の実績に準じると考えれば、「ジェレミア・ジャパン」と遜色そんしよくないレベルのものは保証できる。基礎的な条件は、彼が望むレベルをクリアできているはずだったが、問題はそこではないようだった。

「いや、あんたが困ってるのはよく分かるし、助けたいのは山々だけど、俺も無責任なことば言えないよ」彼は自分に確かめるように、うなずきながら言った。「話を聞く限り、俺が社長に就いたとしても、劇的に状況を改善させられるとは思えない。そう感じながら引き受けるとしたら、それはあんたを騙だましてるのと同じでね、それは俺にはできないな」

「不安に思うのは分かります。でも、高井さんの能力を私は信じています。今の危機を救う力は持つてらっしゃると思っっています。ですから、どうか力を貸していただけないでしょうか」

小穂はそう言っ頭を下げたが、高井の返事は変わらなかった。「俺を買ってくれてるのは嬉しいけど、客観的に見て「フオーン」は、あなたが捉とらえてる以上に難しい状態にあると思うよ。カリスマ性のある創業社長が身を引いて、大手資本の手もはねつける。そんな中で、新しい人間がぼっと出てきて、傾いた経営を立て直すって

いうのはね、そんな簡単に成功するとは思えない」

「でも、それしか手立てがないんです。それでやらなきゃいけないんです」

「だとしたら、俺が鹿子かのこさんに言えるのは一つだな。俺なんかじゃなく、もっと相応しい人間を探さなきゃ駄目だ。無名だけど能力があるってだけの人間じゃ不十分だよ。「フオーン」よりずっと大きい会社で実績を上げてて、この人が乗りこんできたなら「フオーン」も変わるかもしれないと、あらゆるステークホルダーに思わせることが出来る人間じゃないと、この局面を打開することはできないと思うよ」

それは確かに、経済界にその名が通っているような経営者を連れてこられるのであれば、社長交代の一手は劇的な効果を生むだろう。
横手圭よしてけいち一クラスとまではいなくても、例えば岩清水いわしみずのように、千人規模の会社をイケイケで率いているようなやり手であれば、そのインパクトは強烈だ。

しかし、基本的にプロ経営者というのは、前職より規模の小さい会社に移ろうなどとは考えない。「フオーン」を救うことに特別の使命でも感じてくれれば別だろうが、それを期待して動くのは、この状況において、あまりにも考えが甘すぎる。

どうすればいいのだろう……小穂は高井が示した人物像を手中に

するイメージが湧かず、ただただ途方に暮れた。

「むずかしいわねえ」

「クララ」の吉野美代子よしのみよこも、小穂の話を聞いて、そう洩もらした。

とりあえず、手当たり次第に相談してみようと考え、小穂は美代子に声をかけてみた。彼女は「キャンディーボックス」という大手アパレルメーカーに在籍していたので、誰かいい人材を知っていないかという思いだった。

「アパレル業界自体、そんなに元気のある会社って多くないし、顔で仕事ができるような経営者って、限られちゃうわよね。「キャンディーボックス」だって、トップは創業家の人間だから、ほかの会社に引き抜くなんてことは、さすがに無理があるしね」

「そうですね……」

瑞季みずきに断って、セレクトショップ「ファビュラス」社長なかにしゆうの中西勇作さくにも会いに行ったが、ここでもこれという人物の名前は聞けなかった。

「変な話、「フォン」を買いたいっていう人だったら、探せば何人か出てくると思いますけど、そういう名の通った人を引き抜こうっていうのは、なかなか難しいですね。アパレルの世界はだいたいみんな、自分のとこのブランドに愛着を持ってやってるわけだから。

外国のプロ経営者だったら、また違うかもしれませんが」

「フオーン」が売上の半分以上を海外で稼いでいる企業であるなら、外国人経営者も選択肢に入ってくるだろうが、今は社内を落ち着かせて国内事業での信用を取り戻すことが最優先課題なので、やはり、キャンディデイトは国内から探すべきだろうと思う。

早くも手詰まり感を覚えた小穂は、花緒里や並木にも、誰かいい人材がいれば教えてほしいと頼みこんだ。

「いい人がいれば、もちろん教えるけどねえ……一カ月で何とかするっていうのは、けっこうハードル高いかもね」

通常のサーチでも、一カ月で何とかするのは、キャンディデイトの一応のリストを整えるあたりまでだ。キャンディデイト側にも決断までの時間が必要だし、決断してからも、身辺を整理する時間が必要になる。半年、一年という余裕があれば、それも問題にはならないのだが、こちらは一刻を争っているので、キャンディデイトは必然的に限られてしまうことになる。

それでも、パソコンの画面に担当のキャンディデイトのデータを出して、ああでもないこうでもないと考えてくれた花緒里はまだましで、並木は十秒ほど思案顔を見せただけだった。

「大丈夫。鹿子ちゃんなら、何とかなるよ。ちゃんと考えれば、何かいい答えが見つかるはずだから」

取り繕うつくろような笑みでそんなエールを送られ、小穂はそそくさと彼の執務室を出てきた。

一番真剣に悩んでくれたのは、畔田だった。

「ジェレミア・ジャパン」の社長就任への準備を進めている彼は、その日も時間を見つけて「クラブ紗さ也加か」に顔を出してくれた。

そして、小穂から「フォン」の後継探しの話を聞くと、彼は神妙な顔つきになって、悩ましげにうなづいてみせた。

「ジェレミア」の話がなかったら、俺が手を挙げてただけど……」
対外的に名の通った経営者という条件には少し当てはまらないかもしれないが、畔田は根っからのアウトドアファンであり、カラーは確かに合っている。そして、社内のごたつきを抑える意味でも、彼のような落ち着きのある人間は、今の「フォン」のトップに相応しいと言えた。

一足先に話が決まっていただけに、当然、選択肢にも入っていなかったが、彼がフリーだったら、「フォン」の社長をやってもらえたのかもしれないのだ……小穂は時のいたずらというべきものを感じ、残念に思った。

「本当ですよねえ……でも、それを言っても始まらないし」

小穂はそう言って、気持ちを切り替えようとしたのだが、畔田は

それからしばらくも、そのことにこだわっていたようだ。

「さっきの話だけだよ」

お酒が進んだあと、彼は話を戻してきた。

「何とかならないかなと思って……」

「何とかって……？」小穂は真意を測りかねて、彼をただ見る。

「いや……」畔田は言い淀よどんでから答えた。「前にも話したことあると思うけど、俺は課題を抱えた経営ほど、やってやろうって気になるんだよね。「ジェレミア」は、ほかにも社長のなり手がいるのかもしれない。「フォーン」になり手が見当たらないとしたら……」

「やめてください」小穂は彼の言葉をさえぎった。「気持ち嬉しいですけど、そんなことは望んでません」

しかし、彼の顔つきは真面目まじめなものだった。

「俺はまだ内定をもらってるだけで、正式に就いたわけじゃないよ」
「駄目です。それでしたら、「ジェレミア」に畔田さんを紹介した私が、また「ジェレミア」から畔田さんを引き抜くことになります。

そんなことは、ヘッドハンターとして許されることじゃありません」
「もちろん、普通ならそうだと思う」畔田は言う。「けど、お家が一大事だっていう今、それにこだわってる場合かな。守らなきゃいけないものがあるときは、ほかを犠牲にしても、それを守りにいく必要があるんじゃないかな」

畔田にそう突きつけられ、小穂は煩悶はんもんする。

今、「ジェレミア」に不義理をしてでも決断しないと、「フオーン」の危機は救えないのだろうか。

もしかしたら、そうかもしれない。有力なキャンディデートが浮かばない以上、そう言わざるをえない。

なら、どうする。

小穂は苦渋くじゆうの選択を抱えこみ、身がよじれるような思いで沈黙した。

悩めばいくらでも悩むことができた。しかし、一緒に悩ましげな顔を見せている畔田と目が合うと、小穂は反射的に笑みを作っていた。

「やだ、いくら何でも、そこまでの危機じゃありませんよ。ちょっと、心配させすぎちゃいましたかね」

畔田はふっと力が抜けたような顔をした。

「……そう？」

「はい、大丈夫です」小穂は強がった笑みのまま、繰り返した。「大げさに言ったほうが、誰かいい人を紹介してもらえるんじゃないかって思っただけです。ごめんなさい。そこまでじゃないんで……本当に」

「なら、いいけど」彼はまだいくらかすつきりしていないような言

い方で、そう応じた。「話を聞いてると、居ても立ってもいられなくなってきたね」

「酔いが醒めてから、変な約束したって、後悔するところだったかもしれないよ」

そう言っつて小穂が笑うと、畔田の表情がようやくほぐれた。

「そんなことないけど」彼は肩をすくめて言う。「鹿子ちゃんは、これまで俺のためにがんばってくれたから、困ってるのとこ見ると、ほっとけなくてね。俺だけ充実してるっていうか……」

「そんなこと……」

小穂は首を振ったが、畔田は話を続けた。

「次の仕事も決まってる、プライベートでも結婚も決まってるって感じだから、何か申し訳なくてさ」

「え……?」

小穂はぽかんと畔田を見る。

「あれ、言っつてなかったっけ？」畔田は頭をかきながら言う。「俺、今まで独身だったんだよ」

「い、いや、独身なのは聞いてましたけど」小穂は舌をもつれさせながら言う。「結婚……したってというのは初めて聞いたんで」

「もちろん、それは今、初めて言ったからね」畔田はそう言っつて明るく笑う。「つい数日前に決まったことだし、結婚したわけじゃなく

て、これからするって話だよ」

どちらにしても、いきなりの話だ……小穂は口をあぐりと開けるしかなかった。

思い返してみれば、確かに畔田からは、特別な関係に踏みこもうとする言動があつたわけではない。

しかし、彼とは、一緒にボルダリングをやったり、高尾山に登ったりと、近い距離感で接してきて、ただのヘッドハンターとキャンディデート、あるいはクラブホステスと客という関係だけではない親愛の情を育んでいたつもりになっていた。

もちろん、文句を言える筋合いのものではないが……。

気は抜けてしまった。

ヘッドハンターとして、いろんな人を見てきたが、こういう方面の眼力は相変わらずついてないなと思った。

8

九月最後の「フオーン」の経営戦略会議は、冷やかな空気が流れる中、二、三の小さな事業計画を検討するだけで終わろうとしていた。

外部環境では依然、嵐が吹き荒れている一方で、この会議室は妙

に静まり返っている。現状を打開しようにも、それだけ打つ手がな
いということでもあり、会社が抱えている停滞感をそのまま表した
ような会議だとも言えた。

「ほかに何もなければこれで」

隆造りゅうぞうがそう口にしたところで、「待ってください」と大槻の手が
拳こぶしがった。

「今日はこれで終わりなんでしょうか？」

彼はどこか芝居がかった言い方で、意外そうに尋ねてきた。

「何か？」隆造は訊きく。

「何か、ではありません」大槻は口調に不遜ふそんさを隠かくそうともせず、
唇くちびるを尖とがらせて言った。「事故後、会社が置かれている状況は何も変
わっていません。株価は相場来安値を更新し続けている。このまま
では、冬の賞与も満足には支給できなくなります。それをほつたら
かしにされるおつもりですか？ 一度改めて、事故対応の総括そうかつ、責
任の所在の明確化などをすべきではありませんか？」

「お、大槻くん」深谷が頬ほおを震ふるわせて声を上げた。「あまり出すぎ
たことを言うもんじゃないよ」

「何がですか？」大槻は深谷をひとにらみした。「そういったことを
避けていては、今後の方針など、何一つ立てられないでしょう」

「それはそれで、時間をかけてじっくりやればいいことじゃないか」

「いつやるんですか？」大槻はほかの出席者たちにもらみを利用させるように見回し、最後に隆造のところで視線を留めた。「風の噂で、社長が何やら重大な決断を固めたとお聞きしました。私は今日、この場で、それがうかがえるものと思っておりますが」

深谷ももはや、たしなめる言葉を失ったように、ただ顔を強張こむばらせている。

ほかの者も大槻の勢いに圧倒されて、顔色をなくしている。しかし、それだけでなく、その勢いに乗って、隆造に覚悟を迫るような視線を向けてくる者もいる。

「ある決断をしたのは事実だ。来週取締役会で話そうと思つてい
る。」

隆造がそう言うと、大槻は矛をほこいったん収めるように、鼻から息を抜いた。

「そのご決断が来週まで変わらないことを願います」
彼は不敵にそんな言葉を送ってきた。

九月も終わりが近づいていた。

「フォン」の後継社長探しは空転を続けていた。

花緒里を介して、カリスマ経営者である横手圭一の部下だった人物に会ってみたが、小穂にはぴんとこなかった。

数千、数万人規模の企業で働いてきた者にとって、二、三百人規模の会社を救うことに意義を見出すのはなかなか難しいようだ。それが透けて見えると、たとえ有能であつても任せることにはためらいが生じる。この人ならという確信がない限り、小穂も心を固めづらい。これまでのヘッドハンターとしての経験から、これという人材に会うことで生まれるその感覚は肌で分かっているつもりだが、こうなってくると、そうした出会いが本当に訪れるのだろうかと不安にもなってくる。話が話であるだけに、慎重になりすぎている自分も意識する。

しかし、このまま決め手に欠くと言いついて、後任を見つけないなら、「フオーン」はずっと危機のままなのだ。

父が来月上旬の取締役会で辞任を表明するかもしれないという話を深谷から聞いた。大槻に強烈な突き上げを食らい、追いこまれてしまったようだ。

小穂が父に大見得を切った一カ月という期限もそのあたりであるから、何とかしたいところなのだが、見通しは暗いといしか言いようがない。

そんな中、畔田から、かねてより約束していたフライフィッシングに行こうという呑気な誘いが入った。

小穂としては、社長探しが行き詰まっている上、畔田の結婚の予定まで聞かされて、とてもそんな気にはなれないのだが、彼はまったく意に介しておらず、九月いっぱいけいりゆうで溪流は禁漁になってしまし、十月からはいよいよ仕事が始まるので、今しかないとやる気に逸はやっている様子だった。

そういう態度で来られると、結婚の予定を聞いたからといって、今までのように付き合えないという反応を取るのはおかしな具合に思えてくる。もともと、小穂と彼はクラブホステスと客、ヘッドハンターとキャンディデートという関係以上のものではなく、畔田の認識もそれで一貫しているのだ。

特に、ヘッドハンターとキャンディデートという関係は、これからも続いていく。ここでこちら側が勝手にへそを曲げても、いいことは何もないような気はする。

「いや、ちよつと鹿子ちゃんに会わせたい人間もいるんだよ」

畔田は初め渋っていた小穂に、そんな言葉も向けてきた。それはフィアンセのことじゃないだろうなと思ったが、いろいろ考え、小穂は月末の日曜日、畔田に付き合うことにしたのだった。

その日の朝、畔田は吉祥寺きちじょうじの小穂のマンション前まで、愛車のSUVを駆って迎えに来てくれた。そのまますぐには釣りに向かわず、調布ちようふに回り道して、あるマンションの前で停まると、誰かに電話をかけた。

やがてマンションから、一人の女性が小さなトートバッグを手にして出てきた。

今回は弁当を作ってもいいと畔田に言われていたので、何となく予感を強めていたが、案じようの定、彼のフィアンセだった。

「彼がいつもお世話になってます」

三十代半ばだろうか、優子ゆうこと紹介された彼女は、すらりとして、落ち着いた雰囲気の女性だった。笑顔にも嫌味がなく、畔田同様、余裕が垣間かいま見える。腕によりをかけたであろう弁当を小穂に持たせてくれた。

「私は山とか釣りとかちよつと苦手で、ご一緒できなくてすみませ
ん」

いや、私も十分苦手なのだがと言いたかったが、小穂は愛想笑いで応じておいた。

「彼女は、料理はけっこう上手だから」

弁当を楽しみにしてくれということらしいが、畔田が口にした言葉で、小穂は早くもお腹いっぱいになる。ただ、結婚の話聞いて

から何日か経ち、それなりに気持ちの整理がついていたのか、もともと淡い気持ちでしかなかったということなのか、すべては意外にさらりと受け止めることができた。

いくらアウトドアが苦手だとはいえ、彼氏がほかの女性と一緒に遊びに行っても、この人は平気なのだなど、小穂は関係ないところで妙に感心した。婚約している女性の強みなのかもしれないが、彼女がパートナーであれば、結婚しても畔田は公私ともに伸び伸びがんなばれるだろうなと思った。

「じゃあ、行ってきます」

「気をつけてね」

甘いやり取りを生暖かく見守って、ようやく車は出発した。

「イワナは、ヤマトイワナとニッコウイワナがいて、養殖して放流してるのは、ほとんどニッコウイワナなんだ。ヤマトイワナは言うてみれば“幻の魚”でね、せっかくだから、今日はそれを釣りに行くかと思うてる」

畔田はそう言って、ハンドルを握る。木曾のほうと聞いて驚いた。シートに沈めた腰が痛くなるほどの長時間ドライブとなった。峠道では左右に身体からだを振られ、軽い車酔いを起こした。

未舗装みほそうの狭い道を畔田の車は分け入っていく。左手には切り立った岩壁が迫り、上から落ちてきたような岩が道端に転がっているの

で、小穂は無意識に首をすくませる。反対側を見れば、申し訳程度に設けられたガードレールの向こうに深い谷が口を開けていて、ハンドル操作を誤れば、そのまま呑みこまれてしまいそうだ。タイヤが砂利を踏み散らす音を聞きながら、やはり安易にアウトドアの約束などするものではないかと後悔した。

やがて、谷に向かって迫り出している小さな雑草地に車は停められた。目の前には大きなSUVが一台先に停まっている。

「お、ダイゴロー、来てんな」

「ダイゴローって誰ですか？」

「ほら、会わせたいやつがいるって言ったでしょ」

釣り仲間のことを言っていたのかと小穂は気づいた。てっきり、フィアンセの優子のことだと思っていた。

「まあ、あとで改めて紹介するけど、春山と一緒に登りに行つたのも、こいつとなんだよ」

大学時代のワンダーフォーゲル部の後輩だという。そんな話をしながら、車の中で優子の作った弁当を食べた。車酔いで味はほとんど分からなかったが、普通に食べればおいしいのだろうなと思った。

「ウェーダーは釣り場に着いてから穿くから」

「え？　ここが釣り場なんじゃないんですか？」

「いや、ちょっと歩くんだよ。ほら、トレッキングの格好で来てっ

て言ったでしょ」

確かにそう言われたので、小穂はトレッキングウェアにトレッキングシューズという出で立ちだ。

「荷物は俺が運ぶよ」

外に出て、畔田が荷室からロッドやウェーダーを出した。それを待っている間にも、小さな羽虫が顔の周りにまとわりついてきて、小穂は手足をばたつかせながら逃げ回った。

「そんなのいちいち気にしたら、足踏み外すよ」

畔田は半分本気の口調で言い、バッグを背負って、「行くよ」と歩き出した。

「ちよっと待ってください」

藪やぶの中を下りていこうとする畔田を呼び止める。

「そんなところ行くんですか」

「そりゃ、川は下にあるから」

「熊出ません？」

「出るよ」

「えっ？」

「だから俺も今日は、熊鈴とスプレー持ってきた」畔田は腰に付けた熊鈴を鳴らした。

本気じゃないか……うかつにも小穂は持ってきていない。

「何で高尾山で持ってきたのに、ここで持ってきたんだよ」

畔田はそう言って笑いながら、藪を下りていく。

「こんなとは思わなかったんで」小穂は恐る恐る付いていく。

「でも、飲み物は持ってきました」

そう言うと、畔田はまた笑った。

ノルディックポールも、今日こそ持ってくればよかったと思った。どんな虫がくっついていいるかも分からない枝葉が腕を撫でて気持ち悪いので、ほとんどホールドアップの状態で畔田のあとを付いていく。斜面に気を取られていると、顔に蜘蛛の巣を引っかけた。

やがて、源流と呼べるような水の流れが目の前に現れた。落差のあるごつごつした岩の間を、透明な水が音を立てて涼しげに流れている。

「滑らないように気をつけて」

川沿いの岩場を畔田は上流に向かって歩いていく。

「このへんで釣れないんですか？」

「このへんは餌釣りの竿が入ってるからね。もうちょっと歩くと、人が入れないポイントがあるから、そこで釣る」

人が入れなかったら、我々も入れないのではないかと思うが、とにかく付いていくしかない。大きな岩をときにはよじ登り、ときには飛び降りて進み、くたくたになりながら二百メートルほど歩いた。

しかし、そこで行き止まりとなった。目の前には高さにして五メートル以上ありそうな岩盤が立ちはだかっている。その真ん中を、清水が勢いよく流れ落ちていく。堂々とした滝だ。手前には、なみなみとした水をたたえた滝つぼが広がっている。

どうするのかと思って畔田の横で立ち尽くしていると、彼は「ここ登るから」と滝のすぐ脇あたりの岩盤を指差した。

「えっ、何言ってるんですか？」

冗談だと思つて畔田の顔を覗き見るが、彼は至極真面目な顔をしていた。

「ボルダリングでコツはつかんでるでしょ」

「いやいや」小穂は焦った。「わざわざここ登らなくても、ほかに道はありますよね？」

「ここから三百メートルくらい上流からも入川にゅうせんできるけど、そこからここまで下ろうとすると、川の中を歩かなきゃいけないくて、魚が散っちゃうんだよ。帰りはそこから出るだけだね」

魚が多少釣れなくなろうが別にいいじゃないかと思うが、来た道に戻って五百メートルくらい上から入川し直し、三百メートル下つてくるというのも気が遠くなる話である。

「大丈夫。足をかけるとこはけっこうあるし、万が一、踏み外しても滝つぼに落ちるだけだから」

落ちるだけって……。

「私、ほとんど泳げないんですけど」

「腰に巻いて」と彼はそう言っつて、小穂にロープを渡す。「落ちたら、これで引つ張ってあげる」

だから安心しろと言いたいらしいが、ほとんど、何の気休めにもならない。

しかし、登るしかないらしい。

岩壁はほぼ垂直である。それを見上げながら、来るんじゃないかと、また思う。

「チョークで印が付いてるでしょ。ダイゴローが付けたやつだから、そこに手をかけて登ればいいよ」

小穂は意を決して、滝の脇までカニ歩きで進み、そこから岩盤にへばりついた。岩の出っ張りに足をかけ、少しずつよじ登る。背筋がひんやりとするのは、恐怖感か、滝のマイナスイオンか。

大きな出っ張りにはさすががちりちりとしていて、これなら登れるかもという気にさせられる。ボルダリングの経験もそれなりに大きかったよう、途中までは順調に登り進んだ。

しかし、徐々にペースは落ちていく。真ん中あたりでは薄い足場が続く、本能的に腕に力が入ってしまった結果、握力が大きく削そぎ落とされていった。

「あとちょっとだよ」

何とか、カタツムリのような速度で登っているうち、畔田からそんな声がかかった。

視界一面、岩壁に覆おおわれていたが、少し顔を上げると空が覗のぞくようになった。あと一メートルくらいか。しかし、必死にしがみつきすぎて指が痛い上、握力はほとんど残っていない。

「限界が来ました〜」

ここから岩壁の上に手をかけ、さらにそれをよじ登ることなどできそうにないのを自覚して、小穂はギブアップを宣言した。

「そこまで行ったら、登ろうよ」

「腕が動きませ〜ん」

泣き言を口にしてしていると、「まずいな」という畔田の深刻そうな声が聞こえた。

「何ですかあ？」

「腰のロープがほどけてる」畔田がショッキングなことを言った。

「落ちたら、滝の水流に呑のまれちゃうから、何とか登り切って」

落ちたらアウトなのは分かったが、だからといって、力が湧いてくるものでもない。

「休んでもいいから、がんばって」

畔田はそうするしかないというように、励ましの言葉を送ってく

る。

けれど、休むだけでも体力を使うのだ。

これがボルダリングの壁であれば、下のマットに身体を預ける場合である。しかし、それができないので、立ち往生するしかない。

どうして、こんなところでこんなことをやっているんだろう……体力の代わりに後悔が湧いてくる。本当に来るんじゃないか。

「フォン」の後継者探しも、もうできないかもしれない。兄妹そろって、崖から落ちて死ぬことになるかもしれない……悲観的な思いで頭がいっぱいになる。

不意に、頭上に影が差した気がした。その影がもぞもぞと動いている。

「熊がいます〜！」小穂は岩壁にしがみついたまま、畔田に助けを求めた。「熊スプレーください〜！」

「ははは、誰が熊だよ？」

頭上で男の快活な笑い声が立った。

「ク、クマゴロー……？」

「クマゴローじゃねえよ」男はまた笑う。

「ダイゴロー、引き上げてやってくれ」畔田が下から声を上げる。

「ほら、もうちょっとだ。がんばれ」

ダイゴローの手が小穂の頭の上まで伸びてくる。小穂は足場を懸

命に探して何とか一段登り、左手を差し出した。

ダイゴローが小穂の手首をつかむ。分厚くて大きな手だった。

「ほら、引き上げるぞ」

言うなり、彼は小穂の手を勢いよく引つ張り上げた。肩口まで岩場に引き上がり、小穂は肘ひじで岩にしがみついた。

「落ち着いて足かけて。もう一回、行くぞ」

今度は脇に手をかけて引き上げられ、一気に腰まで岩場に乗り上げた。

助かった……あとは転がるようにしてよじ登り、岩場の上で仰向あおむけになった。荒く息を吐きながら、命があることをしみじみと噛かみ締めた。

滝の音を聞きながら、緑の合間に覗く空を見る。その視界の片隅で、大柄な男が愉快ゆかいそうに笑っている。

「よくがんばった」

「ありがとうございます」

面長おもながで頬あこから顎あごにかけて短いひげをたくわえている。偏光サングラスをかけていて、目もとはよく見えないが、人はよさそうだ。

ダイゴローは小穂をまじまじと見て、小首かしを傾げた。

「あれ、あんた、婚約者じゃないね」

「違います」

バタバタと決まった釣行だから無理もないが、畔田は各方面にいろんな説明が不足しているようだ。

やがて畔田が登ってきた。

「クロさん」ダイゴローが畔田に声をかける。「会わせたい子がいるっていうから、てっきり写真で見せてもらった婚約者かと思いましたがよ」

「違うよ」荷物をくくりつけていると思しきロープを手繰り寄せながら、畔田は言う。「あの子はこういう遊びとか好きじゃないから」
たいていの女は、こんな崖を必死に登ってまで釣りをすることなど好きではないと思いつつながら、小穂は聞いている。

「その子は鹿子ちゃんだよ」畔田は荷物を引き上げ、話を続けた。「俺の妹分で、ヘッドハンターやってる子」

畔田の口から「妹分」という言葉を聞くのは初めてだったが、今となってみれば、そういう認識だったかと納得できる話でもある。

「ああ、じゃあ、「ジエレミア」の？」

「そうそう」

それで話は通じたようだった。

「へえ……ヘッドハンターね」ダイゴローは意外そうに小穂を見た。「それだけじゃないよ」畔田は少しいたずらっぽく言い足した。「「フオーン」の社長の娘さんでもある」

「えっ、「フォーン」の!？」

小穂が反射的にのけ反るくらい、ダイゴローの反応は大きかった。

「いやあ、そうか」ダイゴロー感慨深そうになった。「「フォーン」
はいいよね。俺は一応、〃サザンクロサー〃なんだけど、意外と隠
れ〃フォーンニスト〃なんだよ。今日のロッドも「フォーン」のだし
ね」

「あ、ありがとうございます」

けっこう微妙な褒め方だなど思っていると、「彼はね」と、畔田
が紹介を始めた。

「名前がダイゴだから、ダイゴロー」

「ダイゴ……」

「醍醐味の醍醐」

「ああ、醍醐さん」

小穂はその名前を聞いて、もやっとした感覚に襲われる。仕事関
係でその名前を聞いた覚えがあるのだ。

それから一瞬置いて、もしやと思い出し、目を見開いた。

「この間まで「サザンクロス」の社長だった男って言ったほうが早
いかな」

「うわっ!!」

小穂は驚きのあまり、大声を上げていた。

思い出した。「ザ・サザンクロス・ジャパン」は五、六年前、三代半ばのMBAホルダーを社長として外部から招いたのだ。そして、その手腕あってか、業績において「フォーン」との差を一気に広げたのである。

「アウトドアのライバル会社が、クロさんの弟分と妹分こえつどうしゆうで呉越同舟とは面白いなあ」

醍醐はそう言っ、て、からからと笑う。

「この間までっていうのは？」

「まあ、俺と一緒にだね」畔田が答える。「春に辞めて、充電生活を送ってるんだよ」

「クロさん見てたら、俺も「サザンクロス」はそろそろいいかなって思えてきてね」醍醐は冗談を口にするように言った。「クロさんも、一緒に山に行こうぜって誘ってくるし」

「こういうこと聞くと、何か適当なやつに思えるかもしれないけど、本社のトップ交代で方針があれこれ変わったりして、こいつはこいつなりに神経をすり減らしてたんだよ」畔田がフォローするように言った。

「いやあ、俺、すり減らすような神経、持ってたっけな」醍醐はそうとぼけて、笑っている。

「二年後輩だけど、俺より優秀なのは間違いないから」

わざわざそんな言葉を付け加えられれば、彼が醍醐を小穂に引き合わせた意図を理解しないわけにはいかない。

「お、ライズだ」

畔田はそんな自分の意図をさらりと隠すようにして、魚の跳ねた水面を見る。

「まあ、いろんな話はあとでゆつくりすればいいよ」畔田は言って、醍醐を見た。「彼女、フルライン飛ばせるらしいけど、魚を釣るのは初めてなんだってさ。ダイゴロー、教えてやってよ」

「何でキャストイングだけできるんだよ」醍醐はおかしそうに笑う。

「フオーン」の娘さんは変わってるなあ」

そう言いつつも、醍醐はコーチ役を快く引き受けてくれた。

ウェーダーの穿き方はから始まり、フライの選び方、そして魚へのアプローチと、彼のアドバイスは思いのほか丁寧ていねいで優しかった。しばらくは握力が戻らず、フライも糸にうまく結べなかったが、彼が手伝ってくれた。

ロッドやフライラインも溪流用のものは軽いので、キャストイングで変に力を入れると、たちまち糸が絡からまってしまう。最初は感覚が分からずに四苦八苦していたが、コツをつかんできれいなループを作れるようになると、「お、いいね。そこまで行けば、半分釣れたも同然だよ」と乗せてくれた。

「じゃあ、これ結んで、さっきからライズしてるあのへんにそっと投げてみな」

とっておきだという小さなフライを借り、ゆったりした流れの中に立ちこむ。何度かフォルスキャストでフライラインのループを整えたあと、方向を定めてキャストした。

フライは向こう岸の茂みすれすれに落ちた。なかなかいいところに落ちたと思っていると、水面がごぼっと小さく波立ち、フライが消えてしまった。

「合わせて！」

醍醐の声に驚き、小穂は反射的にロッドを後ろに引いた。ググッと引き戻すような抵抗が、竿先から手もとに伝わってくる。細いロッドがしなつて弧を描く。

「うわわ」

「ライン、手繰って！ テンションかけて！」

言われるまま、フライラインを左手で手繰って、魚を引き寄せる。慌てたせいでバランスを崩し、後ろに転びそうになるが、いつの間にか醍醐が背後に立っていたらしく、背中を押さえてくれた。

「ゆっくり、ゆっくり」

彼は言いながら、小穂の前に回りこみ、最後の抵抗を続ける魚をランディングネットですくい上げた。

やった。

「ほら、いい魚だ」

醍醐は会心の笑みとともに、ネットを小穂の前で掲げてみせた。

「幻の魚ですか？」

「ああ、ヤマトイワナだ。ほら、背中に白い斑点はんでんがないだろ。初釣はつちよう果かがヤマトイワナなんて、大したもんだよ」

ネットの中を覗くと、イワナが褐色かつしよくの魚体をくねくねと動かしていた。

「畔田さん、釣れましたー！」

そう言っただけで見るが、畔田はいつの間にか、数十メートル離れた上流まで行ってしまっていた。小穂の声に振り向いたものの、軽く手を上げただけで自分の釣りに戻る。小穂の初釣果を理解したかどうかは分からなかった。

「写真撮って、あとでクロさんにも見せよう」

「そうですね」

畔田が見ていなくても、醍醐がそばで見守っていてくれたおかげで、何の寂しさもなく、充実感ひたに浸ることができる。

針の外し方も教えてもらい、イワナをリリースする。流れの中に帰っていく魚影を見ながら、ほっと一息ついた。

「イワナって、けっこうとぼけた顔して可愛かわいいんですね」

「餌だと思ってたのが全然違って、びっくりしてるんだよ」

そう言えば、そんな顔だったなと、小穂は笑う。

「ラッキーでした」

「ラッキーじゃないよ」醍醐は言う。「練習してただけあって、キャスティングはきれいだし、これからいくだけでも釣れるよ」

そう言われると、また釣れる気がしてくる。

「さあ、俺も釣るぞ」

醍醐はそう言って、自分でも釣り始める。

並んでロッドを振りながら、小穂はいろんなことを彼に訊いた。

大学卒業後、百貨店でバイヤーを経験し、ノースウェスタン大学のケロッグスクールでMBAを取得、ケロッグの同級生の父親がCEOを務めるアメリカのスポーツシューズメーカーで取締役を務めたあと、「ザ・サザンクロス」に引き抜かれたことなど。

畔田とはお互い独身で時間もできたことから、春以降、山登りなどをともにしていたこと。ただそれも、畔田の仕事が決まったことで、区切りがつけられようとしていることなど……。

「まあ、第二の青春が終わるってとこかな」

醍醐は少し名残惜なごりしそうな口調で言った。

彼自身もいくつかの会社から話をもらっているらしい。

それを聞いたところで、小穂は「あの」と意を決して切り出した。

「フフォン」の現状って知ってますか？」

醍醐はちらりと小穂を見る。

「夏場はずっとイエローストーンにいたから、ニュースくらいでしか知らないけど、あれやこれやで大変らしいね」

彼はフライを付け替えながら、そんなふうに応えた。

「父は辞任の意思を固めてます」

「そりゃ、残念だ」彼は心から同情するように、小さく首を振った。

「いいもの作ってるんだから、今を乗り切れば、また勢いは取り戻せるだろうに」

「醍醐さん」小穂は言った。「フフォン」を助けてもらえませんか」

驚いた様子は見せなかった。

「社長になってくれってこと？」

彼はそう確かめるように訊き、うなづく小穂を見てから、小さく「なるほど」と呟いた。

「フフォン」創業者の娘であり、ヘッドハンターでもある小穂に引き合わされた意味を、彼のほうもようやく理解したようだった。

そのまま場所を変えて釣りを続け、やがて畔田に追いついた。

「釣ってたね」

畔田は小穂のほうもしっかり見ていたらしく、そんな声をかけて

きた。

「クロさん」と醍醐。「鹿子ちゃんからいきなり、とんでもないオフ
アーをもらっちゃいましたよ」

苦笑気味に口にした醍醐の言葉に、畔田は予想していたようにう
なずいてみせた。

「腕利きのヘッドハンターに声をかけられたんだから、喜ぶべきだ
な」

彼はそう言うってから、小穂に目を向けた。

「鹿子ちゃん、ありがとう。俺は先輩面してるけど、ダイゴローに
は学生時代、雪山で滑落かっらくしかけたところを救われたことがあってね。
ようやく、その借りを返せる」

「え……これが借りを返すことになるんですか？」

醍醐には、「フォン」を救ってもらいたいと思っている立場であ
るだけに、彼の話はぴんとこないものだった。

しかし、畔田は「もちろん」と言っただけ。「ダイゴローも俺と
同じで、難題を吹っかけられると燃えるタイプなんだよ。そんな男
に、「ジエレミア」が決まっていなかったら、俺が手を挙げたかったく
らいの話を譲るんだからね」

強引な理屈の前にぽかんとした顔を見せた醍醐は、一瞬ののち、

破顔はがんした。

「ははは、クロさんらしい言い方だなあ」

彼は参ったというように、笑い声を深緑の溪たにに響かせた。

10

十月に入り、取締役会の日がやってきた。

隆造はいよいよ気持ちを固めて、この席に臨んだ。あらかじめ用意されていたいくつかの議題が検討の上、承認されると、隆造の発言を待つようにして、重い沈黙が会議室を満たした。

「では最後に、私のほうから一つ、話をしたい」

表情を引きつらせた深谷が、かろうじてまぶただけは動くといった様子で、盛んにまばたきしている。聞きたくないという思いがそこにこめられているようにも感じ取れたが、隆造は話を続けた。

「このたび、私は、自分の進退について決断をした。きっかけは、大槻くんから、会社を取り巻く現状の厳しさを客観的に伝えられたことが大きかった。このままでは、うちは立ち行かなくなると認識せざるをえなかった」

大槻は無表情で聞いている。先日、隆造を突き上げたときの険はなく、どこかすでに勝ち誇っているような余裕がそこには浮いて見える。

「八月の事故は、私が計画を引っ張り、長年の夢として実現させたオートキャンプ場で起きたものであり、その後の対応も含めたこの件によって、会社全体に決して小さくない影響を与えることになってしまった。これについては誠に慙愧ざんきに耐えない。責任の一端いったんが私にあるのは間違いないことだ」

隆造はそう言って、小さく頭を下げる。それを重く受け止めようとするように、出席者たちはそっと顔を伏ふせる。

「しかし、私はこのことだけで駄目になるほど、「フオーン」という会社が柔やわだとは思っていない。もともと、優れたアウトドアグッズを作るという立場から、冒険する人間を応援してきた我々だ。また残念なことではあるが、それが無謀であれ悲運であれ今も昔も、冒険で命を落とす人間がなくなることはない。その者たちのかたわらには、我々が作ってきた品々もあつたことだろう。詳しく調べるまでもない。例えば私の息子は、「フオーン」のウェアやシューズ、テントや寝袋を持ってオーストラリアの崖に登りに行き、そして命を落とした」

隆造は束の間、唇を結んでから、静かに吐息といきを洩らした。

「それでも、冒険というものが、人間が人間であることを生身で追求していく行為である限り、我々はそれを応援することから逃げてはいけないんだ。いくら危険だろうと、人は冒険をする。「フオーン」

も逃げずに立ち向かっていく限り、必ずよみがえると私は信じている」

隆造は力をこめてそう言い切ってから、少し声を落とした。

「一つの事故だけで駄目になるような会社でないとすれば、今、うちを動揺させている一番の原因は何なのか……それは、ここ最近の業績不振に尽きると私は考える。その停滞感が、一つの事故をもつて社内には大きな動揺を与える結果につながっている。私が今回、責任を取る決断をしたのも、このことに関してであり、それについて少し総括したい。

「フオーン」は上場した年度をピークに、これまで高い成長を遂げてきた。それが近年、陰りが見られるようになってしまった。特にこの一、二年の業績不振については弁解の余地がない。経営戦略が空回りするばかりで、ほとんど結果らしい結果は出なかった。具体的には、私は全米市場への本格的進出を最優先課題に掲げてきた。その方面への指導力を発揮できる人材を重用し、規模を追い求める攻めの経営戦略をずっと推し進めてきた。

しかし、これによって、国内事業に十分な手が回らないという弊害も生まれた。あるいは、中国工場への製造委託を増やしたことで、現場がトラブル収拾に疲弊するという事態も発生した。結果がいまだ数字に表れていないことからしても、この戦略は失敗だったと認

めざるをえない。

本来であれば、新たに経営戦略を立て直し、軌道修正を図りたいところだが、大槻くんから現状認識を問われ、自分の指導力を十分発揮できる状況にないと判断した。そこで私は、自ら社長の座から退くことで責任を取り、現在の混乱に対しての一転機になれば幸いだと考えた」

深谷が絶望するように目をぎゅつと閉じ、頬をゆがめた。衝撃に身を固めるようにして、目を見開いたまま動かない者もいる。

「残念に思ってくれる者もいるかもしれないが、会社のことを考えれば、これ以外に道はなかったと理解してほしい。私と一緒に近年の経営の一端を担ってきた大槻くんは、それゆえ今回の混乱にも敏感であり、私の決断を妥当なものとして受け止めてくれることと思う」

隆造がそう言うって視線を向けると、大槻は畏まったように姿勢を正し、一礼してみせた。

「重いご決断、肅しゆくとして受け止めさせていただきます。私自身、会社のため、社長の手足として粉骨碎身ふんこつさいしんしてきましたが、力及ばぬところがあり、それについては誠に忸怩じくじたる思いでございます」

大槻はそう話し終えると、もう一度、うやうやしく頭を下げてみせた。

「それだけか？」

隆造が問うと、彼は、不意をつかれたような戸惑いの視線を向けてきた。

「まさか君は、何の覚悟もなく、私にこれだけの総括を求めたわけじゃないだろうな？」

大槻の顔が強張る。

「もう一度、言うが、我々の経営戦略は失敗した」

「それはしかし、まだ今は計画の途上であって……」

「みつともない言い訳はするな」隆造は静かに言う。「私は後任が決まり次第、社長を退く。君自身は進退をどう考えているのか聞かせなさい」

後任はお前ではないという通牒つうちょうを視線に乗せて、隆造は大槻を見据えた。

「それは……」

「私に一任するということでもいいのか？」

額に汗をにじませた大槻は、忙せわしなく視線を動かしながら数秒の沈黙を作り、やがて強がるように隆造を見返した。

「もちろんです」

社長室に戻ると、田中に加え、闘病中の坂下も応接ソファに座って待っていた。

取締役会に出ていた深谷も、追って部屋に入ってきた。

「社長はご立派でした」

ソファの一座に加わるなり、深谷はハンカチで目頭めがしらを押さえながら言った。

「大槻くんも社長の気迫の前に、呑まれるしかなかった。社長はすんでのところで、身を挺ていして会社を救ってくれました」

坂下や田中は神妙な口ぶりで、辞任を表明した隆造にねぎらいの言葉を向けてきた。

「君たちにも世話になった。いい時期をみんなですごしたな。俺は幸せな社長だった。ありがとう」

隆造が礼を言うと、彼らは感極まるようにして頬をゆがませた。

「しかし」しばらくしんみりしたあと、坂下が口を開いた。「これで向こうがおとなしくなるとは、言い切れない気もしますが」

隆造は視線でその真意を問う。

「向こうも、そんな簡単に創業社長を追い落とせると考えていたとは思えません。差し違えるのは計算のうちだった可能性もあるかと」

「インフィニティ」は手を引いたと見せかけて、救済を口実に提案を持ちかけてきたわけですから「田中が思案気味に言う。「ここでいったん引いたとしても、時機を見て本格的に仕掛けてくることはありそうですな」

「いずれ社長の再登板が必要になってきますよ」坂下が言う。「深谷
くんは一、二年つないでもらって、体裁が整ったあたりで社長に戻
ってきてもらうのが一番じゃないでしょうか」

その話には、隆造は首を振った。

「俺は引責で降りることになったんだ。そういう人間が再登板なん
てしちゃいけない」

「しかし」坂下が食い下がるように言う。「深谷くんがやって、業績
が上がらないようだと、たちまちビリー・リーに攻めこまれかねま
せんよ」

「たとえ、そうであってもだ」隆造は頑かたくなに言った。「俺が再登板
しなきゃいけないようじゃあ、どのみち「フォン」に未来はない」
しんみりした空気は湿ったまま、重苦しいものに変わってしまった。
た。

「本当は私も、社長と一緒に身を引きたいところなんですけどね……」

深谷は苦しげにそう言った。

「君しかいないのに、何を言ってるんだ」

「何とか、もうちょっとがんばってもらわないと」

坂下や田中が口々に深谷を励ます。

それを聞きながら、隆造は「フォン」の行く手に思いを馳はせる。
ビリー・リーの手に渡ることだけは阻止したいという一心で、大

梶を道連れに身を引くことを選んだが、どうすれば会社が立ち直るかという問題は、隆造からしても答えが見通せないものだった。

縁の下でこそいい働きをする深谷に、一人矢面やおもてに立たせて重責を押しつけるのは酷な気はする。しかし、現状ではほかに選択肢はない。後任を探してくると啖呵たんかを切っていた小穂を、本気で当てにするわけにもいかない。

自分が頼めば、深谷もやるしかないと覚悟を決めるだろう……そんな思いで隆造が口を開きかけたそのとき……。

ノックの音がして、部屋のドアが開いた。

「失礼します」

女性の人影に、一瞬秘書かと思ったが違った。

小穂だった。

この場の重い空気を知ってか知らずか、部屋に足を踏み入れた彼女の物腰には、四人とは異質の軽快さがあった。

「取締役会は終わりましたか？」

「ああ」

隆造が進退を表明する可能性があることを坂下らに聞いていたらしい。それならばと、彼女にも報告しておくことにした。

「正式に社長を退くことになった」隆造は言い、反発を受ける前に言い足した。「もう決まったことだ」

小穂は心の準備を済ませていたように一つうなずいてから、深く頭を下げてきた。

「長い間、お疲れ様でした」

それから彼女は、隆造のすぐ隣まで回りこんできた。その顔にどこか笑みにも似た余裕の色がにじんで見ていることを隆造は見取った。

自信だと気づいたとき、小穂は「社長」と口を開いた。

「後任候補を見つけてきました」

いったいいつの間に、こんな表情をするようになったのか……隆造は彼女を見つめながら思う。少なくとも、「フォン」にいた頃には見たことがなかった。

一言で言えば、頼りにしたくなる顔をしていた。

間に合ったか……隆造はそんなことを思う。

「教えてくれ」

小穂と呼応するように表情を和らげ、隆造はそう頼んだ。

「フォン」の創業社長・鹿子隆造が代表権のない会長に退き、後任に「ザ・サザンクロス・ジャパン」の前社長・醍醐達郎が内定したというニュースは、経済新聞の一面でも取り上げられ、経済界に

驚きをもって受け止められた。

追って、醍醐新社長の「サザンクロス」時代の業績を紹介する記事や、多難な「フォーン」の経営に対する抱負を尋ねたインタビュー記事なども続いた。

醍醐は自身の経営の方向性として、「フォーン」の原点回帰を掲げた。根強いファンを抱える「フォーン」には立ち直るだけの潜在能力があり、原点に立ち返ることが復活への一番の近道であるとメディアに語った。

オートキャンプ場についても閉鎖は考えておらず、遠くない時期に営業を再開したいという考えを明らかにした。その際には、現地で「フォーンニスト」のファンミーティングを開き、アウトドアにおける事故をテーマに、それをどう防いでいくか、どう対応するかという知恵を集めるイベントにしたいと彼は言った。一度だけに終わらせることなく、継続的に催していきたいということだった。

世間の反応は、株式市場で顕著けんちよだった。内定人事の発表から、実際に醍醐が社長に就任した十一月上旬までの三週間のうちに、「フォーン」の株価は二割ほど値を戻した。まだまだ事故前の水準には及ばないが、あとは新社長のお手並み拝見という期待感は盛りこまれたものとなった。

取引銀行など関係先の反応も、おしなべて期待に満ちたものだった。

たという。

醍醐が社長に就き、新体制下で開かれることになった十一月の取締役会の日、小穂はスーツ姿で「フオーン」を訪れた。

社長を引き受けるに当たって、醍醐は条件を一つ出してきた。小穂が古巣を訪ねたのも、そのためだった。

取締役会が行われている会議室に向かう途中、廊下で松山伸好まつやまのぶよしにばったり出くわした。一年半前、会社を追い出された小穂に、あっさり見切りをつけた男……。

「あら」

小穂も驚いたが、向こうは、どうして小穂がここにいるのかというように、さらにぎよつとした顔をしていた。

「お久しぶりです……大槻派の松山さん」

総務部門は大槻が押さえていたという噂から冗談で口にしたただけだったのだが、少し度がすぎていたらしい。松山はひどく取り乱した様子で、「人聞きの悪いこと言わないでくれよ」と唇を震わせた。機を見るに敏な男だから、当たらずとも遠からずだろうと思ったが、それ以上、いじめるのはやめておいた。

「どうしてここに？」松山が訊く。

「醍醐社長に呼ばれたんで」

そう答えると、彼は顔色かおいろを失ってしまった。

「じゃあ、行かないと」

小穂は彼を置いて、会議室へと向かう。

会議室の前では、社長秘書が椅子いすを置いて小穂を待っていた。

その椅子に座り、小さな緊張を吐息に変える。

父の退任表明の日に社長室を訪れたときには、いろいろ頭がいっぱいで自分のことは何も考えていなかったが、今は少なからず感慨に浸ることができる。

もう来ることはないと思っていたのに……。

やがて会議室のドアが開き、中にいた秘書室長が顔を覗かせた。

「お入りください」

促され、会議室に入る。

取締役たちがコの字型に並んで座っている。昔よく見た光景だが、父が中央の席を醍醐に譲り、その隣に座っているのが新鮮だった。

小穂は彼らの前に立ち、一礼した。

「このたび、醍醐社長から、社外取締役就任のお声をかけていただきました、〔フォルテフロース〕コンサルタントの鹿子小穂です。

この古巣を離れて一年半、ヘッドハンティング業界で研鑽けんさんを積んできました。就任した暁あかつきにはその経験を活かして、かつて所属し

ていた商品開発に加え、人事・採用・人材教育などの分野でも積極的な提言を行い、「フオーン」の発展に貢献していきたいと考えています。どうかよろしくお願ひします」

「何か、質問があれば」

そう言つて出席者の顔を見回した醍醐は、発言が特にないことを確かめてから続けた。

「では、承認の意思は、拍手をもって示してください」

一斉に拍手が沸き起こつた。

深谷がうんうんとうなずき、顔をくしゃくしゃにしながら拍手している。

以前は小穂の下にいた商品開発本部の岩井いゐいは、手をたたいたり親指を立ててみせたりと忙しい。

一番力強く拍手しているのは父かもしれなかった。その音は小穂の耳にはつきりと届き、思わず胸が熱くなつた。

醍醐が立ち上がつて、小穂に手招きをする。

ほかの者たちも次々に立ち上がり、まだ拍手は鳴りやまなかつた。醍醐の隣に行き、彼と握手する。やはり分厚くて、温かい手だつた。

彼は小穂の肩に手をやり、父のほうに誘いざなつた。

父も最後に立ち上がった。見ると、その口もとには柔らかい笑み

が覗いていた。

「よく帰ってきた」

父のその言葉を、遠い昔、確かに聞いた憶おぼえがあつた。

そうだと思い出す。

森の中に一本のペットボトルとともに置き去りにされ、泣きながらさまよつて、やつこのことでテントまで戻ってきた……あのとき。目の前の父は、あのときのように、今にも小穂の頭を撫なでてきそうに優しい目をしていた。

どれだけたくましくなれたのかは分からない。

ただ、自分の足で帰つてこられたのを、小穂は少し誇らしく感じる。

帰る場所があるのは嬉しいものだ。

けれど、またすぐに、フィールドに出ていこうと思う。

もう、昔の自分ではなく……。

冒険の楽しさに気づいてしまったから。

〈了〉